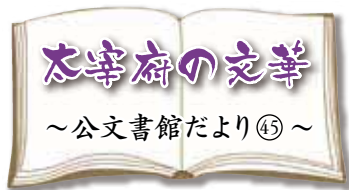


太宰府における廃仏毀釈と天本茂左衛門

明治政府は天皇の神権的權威の確立のため、神道国教化政策を取りました。廃仏毀釈とは、その政策のもとで、寺院からの神社の独立や神社からの仏教的要素の除去などが行われた、寺院・仏像・仏具などの激しい破壊活動のことです。ここ太宰府でも、太宰府天満宮や龍門神社において、廃仏毀釈により仏教的要素が払拭されたことが、郷土史家の伊東尾四郎によって報告されています（『新編明治維新神仏分離史料』10）。

この報告によると、太宰府天満宮では、十一面観音立像が甘木市安長寺に、梵鐘と仁王像が観世音寺に（梵鐘は元來観世音寺のものであったが、一時太宰府天満宮に移されていた）、十二天立像が飯塚市太養院に移されています。龍門神社では、木像や仏具は焼却され、摩崖仏は梵字を削り取られ、五百羅漢は谷底に突き落とされたり、割られたりしています。下宮の祇園社には仏像を安置していたため、建物ごと燃やされてしまいました。

同報告には「太宰府神社の仏像、仏具、一切経、袈裟の類は肥前田代の天本茂左衛門が巧妙に請ひ受けて持ち去った」と記されています。天本茂左衛門は、肥前国基肄郡田代領の出身でし



たが、幕末期に太宰府に出て出家し、3年ほど太宰府天満宮社家の六度寺で札配りを行っていたところ、社家の明星坊が20年ほど無住であったことから、復旧のためここに住居を移しました。その後、明治維新となり、廃仏毀釈運動のため破壊・焼却されそうになった仏像等を守るため、尽力したというわけです。

天本は、その後、宮浦村（現基山町）に浄土真宗東本願寺派光明光寺を建てるため奮闘しますが、明治16（1883）年、落慶を待たずに死去します。明光寺の本尊は、天本が太宰府天満宮から請い受けたと思われる阿弥陀如来像でした。その他、基山山麓の天本の出身地とその周辺の集落にも、天本から譲り受けたと伝えられる仏像数体が遺っているとのこと。

廃仏毀釈により多くの仏像等が被害を受けたのですが、太宰府天満宮の場合同じく、天本の活躍などもあり、ある程度遺っています。報告の記載以外にも、太宰府光明寺に十一面観音坐像・薬師如来坐像、同西正寺に聖徳太子立像、基山町大興善寺に十一面観音坐像など、市内外の寺院に移され、今も大切に安置されています。

太宰府市公文書館 朱雀 信城